



→陽差しは暖かい。風さえ吹かなければ、過ごしやすいのに、自然はそう人間の思い通りにはしてくれない。江戸川の岸辺のススキが悔しそうに風に揺れていた。



↑近所の家の庭で桜が咲いた。毎年、この時期、蠟梅と競うように咲く。ポツリ、ポツリと咲く。

矢切はもう暮れにはいった。

その証拠に客が少ない。おばあちゃんや、おばちゃんたちは、たぶん、せわしないのだろう。それにひきかえ、若い男女のペアが目につく。

それに、なにより風が冷たい。日溜まりを選んで歩いても身が縮こまる。

「三十度だよ、三十度」

いきなり、若舟頭の第一声。

また解説が必要だ。夏は三十八度もあった気温が、この土日は八度しかなかった。すごい温度差だ。そういいたいのだ。そして、続ける。

「この温度差、なんとかならないのかねえ」

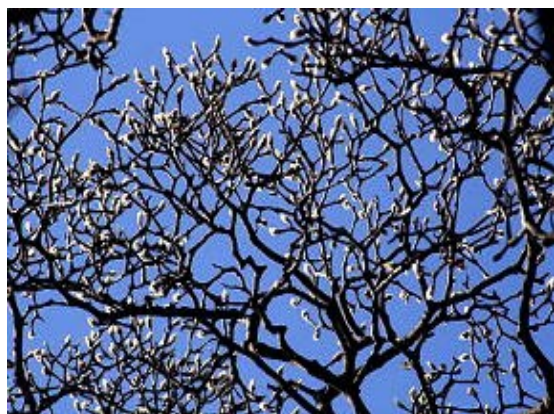
なんかきそうだと思った。やっぱりきた。若、独特の前振りだ。

「うちは家を建てるときに屋根の上にソーラーを設置したんだよ。もう三十年も前。いまじゃ故障しても修理部品がない。そのくらい古いやつ。それなのに、今日みたいに寒い日でも熱いくらいのお湯が出る」

太陽エネルギーはこのくらいすごいのだ、といたいのだ。

今週のクマ

→ゴルフボールを拾いがてらクマを連れて歩いてくれるロストボール氏が、このところ姿を見せない。かわりに散歩につきあってやったら、引きまわすこと引きまわすこと。いつまでも江戸川の土手を歩きまわった。犬を飼うのも大変だ。



↑青い空を見上げた。辛夷の花の蕾が競うようにふくらんでいた。知らないところで春は始まっていた。

「もう十年以上前の話だけど、壁掛けテレビがあったらいいのにな、と思っっているうちに、ほんとうに壁掛けテレビができたじゃない。できるんだよ、やれば」
話が飛んだ。引き戻す。

若はいう。太陽のエネルギーを使って発電し、それをバッテリーに貯めておいて暖房や煮炊きに使う。

「な、これだとエコだろ。もつとそういうことを考えてもらいたいねえ」

若舟頭は渡し舟を漕ぎながらそんなことを考えているのだろうか。

実際すでに持ち運び自由のソーラー式ポータブル発電機が市販されている。重さ十キロぐらいだから、それほど重たくはない。問題は出力だ。いまのところ十二ボルト、あるいは二十四ボルト程度。家庭用の電気には劣る。

「へー、あるんだ。やればできるんだ」
物知りの若が知らなかった。

「だけどさ、それって、かんたんには売り出されないだろうな」

ひとり納得する若に聞いた。

「どうしてッ！」

「そんなことをしたら東京電力をはじめ大手電力会社が困るからさ」

世の中、そんなものなのだろうか？